

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 明治期の中国語関係書における“会”について

|       |                                                                                                                                                           |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-02-24<br>キーワード (Ja): 明治期の中国語関係書 “会”<br>の「可能性」用法,<br>「国立国会図書館デジタルコレクション」<br>キーワード (En):<br>作成者: 金, 敬玲<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002000077">https://doi.org/10.57529/0002000077</a>                                                                     |

# 明治期の中国語関係書における“会”について

## On “HUI” in Chinese language education-related Texts of the Meiji Period

金 敬 玲

キーワード：明治期の中国語関係書 “会”の「可能性」用法 「国立国会図書館デジタルコレクション」

关键词：明治时期的汉语教育相关书籍 “会”的“可能性”用法 “国立国会图书馆Digital Collection”

### 要旨

「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧できる明治期の中国語関係書を調査資料に“会”の使用状況および用例用法を確認し、“会”の「可能性」用法についての言及の状況を考察した結果、当時の中国語関係書において「可能性」を意味する“会”がまだ普及していないという結論に至った。その中で、“会”の「可能性」用法について理解し、正しい例文を示しているのは、「文法書」では『支那語助辞用法』のみ、「教科書」では『亜細亞言語集支那官話部増訂』のみで、「会話書」における“会”は「能力」用法が「可能性」用法をはるかに上回っており、「読本」では「可能性」用法の用例数が「能力」用法の用例数をやや上回るものの、日本人著者の場合「能力」用法の用例数が多いことが指摘できる。また、“会”の「可能性」用法の学習者への普及が難しいことについて、「可能性」を表す“会”の日本語への直訳が難しいことと、日本語に対応する表現が見出し難いこととの2つの理由を挙げ、“会”が現在の「可能性」として解釈できるようにまで至った経緯についての一つの可能性を提示する。

### 摘要

本文以“国会国立图书馆Digital Collection”中可查询到的明治时期汉语教育相关书籍作为调查资料，对当时“会”的“可能性”用法的使用情况进行了考察，得出在当时的汉语教育相关书籍中，表示“可能性”的“会”尚未普及这一结论。在“文法书”中，《支那語助辞用法》是唯一一部正确解释“会”的“可能性”用法并给出恰当例句的资料；在“教科书”中，《亜細亞言語集支那官話部増訂》是唯一一部正确解释了“会”的“可能性”用法的资料。而在“会话书”中，“会”的“能力”用法例句远远超过“可能性”用法例句；在“读本”中，“可能性”用法的例句略多于“能力”用法的例句，但是在日本人所撰写的资料中，“能力”用法的例子更多。对此本文提出了“会”的“可能性”用法在学习者中难以普及的原因。一方面，这可能是由于“可能性”用法的“会”在很多情况下很难直译为日语，另一方面，寻找与日语相对应的表达也很困难。最后，文章提出了关于“会”从不被正确认知到现在被解释为“可能性”用法的过程的一种可能性。

## 1. はじめに

金(2022)では、明治33(1900)年に出版された『清語会話案内』<sup>(1)</sup>における中国語の能願動詞に対応する日本語の表現形式について考察し、「会」に関して、「能力」の意のみ見られ、「可能性」の意のものは出ていない。これについては、当時「可能性」を意味する“会”がまだ普及していなかったか、それとも単に『清語会話案内』に見られないだけか、なお追究の余地がある」と述べているが、2022年12月の「国立国会図書館デジタルコレクション」のリニューアルにより明治期の中国語関係書が多数閲覧できるようになり、「可能性」用法の“会”の取り上げ方についての考察が容易になった。

そこで、本稿は、明治期の中国語関係書を調査資料に“会”の使用状況および用例用法を考察し、金(2022)における考察結果を検証することを目的とする。

## 2. “会”について

中国語の“会”の意味用法について、大きく以下のように3種類に分けられる。

I 日本語の「～できる/～V(ら)れる」のような表現と対応しており、能力を表わす表現としてよく“能”との使い分けについて議論されている。

i 我会写汉字。(私は漢字が書けます。)

II 日本語の「～長じている」「上手にできる」のような表現と対応しており、Iからの派生用法である点については従来、異なる意見はない。また、意味用法の特性上、程度副詞とともに用いることが多い。

ii 她很会说话。(彼女は口がとてうまい。)

III 日本語の「～だろう」「～に違いない」「～はずだ」「～かもしれない」のような表現と対応しており、諸説あるが、「可能性」「蓋然性」を表わすとよく言われている。

iii ①今天会下雨吗？(今日は雨が降るだろうか。)

---

(1) 西島良爾(1900)『清語会話案内』上巻 下巻 青木嵩山堂

②今天天气不好，他不会来了。(今日は天気が悪いから、彼は来ないはずだ。)

Ⅱの用法は程度副詞とともに使われることが多いが、程度副詞がなくても使用できるため、Ⅰとの区別は明確ではない。さらに、ⅠとⅡは連続的な関係にあると考えられ、「できる(Ⅰ)ようになってからそれが上手になった(Ⅱ)」との解釈もあり得ると考慮し、本稿においては、ⅠとⅡを「能力」<sup>(2)</sup>に分類し、Ⅲの「可能性」に関するものと大きく2種類に分け、なお、「可能性」に関するものを主に考察することとする。

### 3. “会”に関する先行研究について

“会”に関する先行研究は可能表現として“能”，“可以”との異同について論じるものが多い。黄(1995)は、“能”，“可以”，“会”それぞれの基本的な意味について“能”は「達成」、「可以」は「許容」、「会」は「自発」とまとめている。大江(2015)は、「可能」概念を構成する力に着目し、可能形式“能”，“会”，“可以”を分析している。その他、魯(2004)や侯(2009)なども挙げられるが、すべて“会”の「可能」を表す部分に注目したものである。

一方、「可能性」に注目した研究も近年盛んに行われている。王(2016)は、「判断のモダリティ」という考察の枠組みの中に入れ、“会”の「能力」「長じている」以外の意味を対象に考察している。孫(2018)は“会”の意志を表す意味機能を、孫(2021)は“会”の「未来(確かな予測)」を表す用法を考察している。羅(2021)は、「能力」「可能性」の他「意志+可能性」を新たに提起している。

このように、“会”の「可能性」を表す意味用法について様々な説があり、ときには、なくても文が成立する場合も存在し(例文iii①②)、また、日本語の動詞無標形式と対応する場合も少なくないため、『清語会話案内』に現れていないのはやや不思議に思われるが、あり得ないことではない。但し、“会”の「能力」以外の意味用法も会話において不可欠な内容であることは確かである。

そこで、本稿では、「能力」以外の意味用法で用いられる“会”の明治期の中国

(2) “会”を「可能表現」という用語で指す先行研究も多いが、それは「能力可能」を表していると考えられる。また、「可能性」との区別も図りたいので、本稿では敢えて「能力」という表現を用いることにする。

語関係書における出現状況や使用状況および用例用法について考察し、「当時「可能性」を意味する“会”がまだ普及していなかったか、それとも単に『清語会話案内』に見られないだけか」について検討する。

#### 4. 本稿における調査資料について

六角(2001)によると、「中国語関係書」は、慶応3(1867)年から昭和20(1945)年までに1437種刊行されている。「中国語関係書」は「学習書」「時文・尺牘」「語彙・辞典」等に細分されるが、明確な境界があるわけではなく、連続的なものである(園田2017)。

国立国会図書館では、インターネットで資料の画像を見ることができるサービスを提供しており、「国立国会図書館デジタルコレクション」がそのコンテンツになっている。また、2022年5月からは個人向けデジタル化資料送信サービスを開始し、同年12月には「国立国会図書館デジタルコレクション」がリニューアルされ、これによって、様々な資料をどこでも簡単に閲覧できるようになり、そこには近代中国語関係書も数多く含まれている。

近代日本の中国語関係書は「中国語」を「清語」「官話」「支那語」等で表現するのがほとんどである。本稿では、「国立国会図書館デジタルコレクション」の「タイトル」にそれぞれ「清語」「官話」「支那語」を入力した検索結果<sup>(3)</sup>にみる「中国語関係書」を調査資料にする。なお、1912年までの出版物に限定する。

『現代支那語学』<sup>(4)</sup>(1908)のような語学全般について論じているものや、『支那語教科書 発音編』<sup>(5)</sup>(1902)のような発音のみ教授するもの、また単語のみ記載されている「便覧」類を除き、上記の検索結果にある「中国語関係書」を、さらに、動詞など文法項目が記され例文等が提示されるものを「文法書」に、漢字の発音や四声<sup>(6)</sup>についての説明があり、適宜例文も提示しているものを「教科書」に、単語があるものの、会話文がメインとなるものを「会話書」に、物語や記述文章からなっているものを「読本」に分類し、【表1】に示す。

---

(3) 2023年5月26日に検索した結果に限る。

(4) 後藤朝太郎(1908)『現代支那語学(帝国百科全書：第177編)』博文館

(5) 岡本正文(1902)『支那語教科書 発音編』文求堂

(6) 中国語の音節の声調。

【表1】本稿における「中国語関係書」について

|    | 文法書 | 教科書 | 会話書 | 読本 | 計  |
|----|-----|-----|-----|----|----|
| 部数 | 12  | 15  | 29  | 5  | 61 |

## 5. 「文法書」における“会”について

本稿では、文法項目について解釈するものを「文法書」とする。調査資料で見られる「文法書」を【表2】に示す。なお、「可能性」の“会”についての言及の有無を「有無」に示す。

【表2】「文法書」における「可能性」の“会”の現れ方

| No. | 文法書                      | 著者 / 編者             | 出版社 / 者 | 出版年          | 有無 |
|-----|--------------------------|---------------------|---------|--------------|----|
| 1   | 支那語学楷梯                   | 中島長吉                | 小林新兵衛   | 明治28年(1895年) | 無  |
| 2   | 支那語助辞用法 <sup>(7)</sup>   | 青柳篤恒                | 文求堂     | 明治35年(1902年) | 有  |
| 3   | 支那語異同弁                   | 原口新吉                | 文求堂     | 明治37年(1904年) | 無  |
| 4   | 支那語動字用法                  | 張廷彦                 | 文求堂     | 明治37年(1904年) | 無  |
| 5   | 清語文典                     | 信原継雄                | 青木嵩山堂   | 明治38年(1905年) | 無  |
| 6   | 日清語学金針：注釈 <sup>(8)</sup> | 馬紹蘭等 <sup>(9)</sup> | 日清語学会   | 明治38年(1905年) | 無  |
| 7   | 官話文法                     | 張廷彦, 田中慶太郎          | 救堂書屋    | 明治38年(1905年) | 有  |
| 8   | 清語正規                     | 清語学堂速成科編            | 文求堂     | 明治39年(1906年) | 有  |
| 9   | 初歩支那語独修書 <sup>(10)</sup> | 原口新吉                | 広報社     | 明治39年(1906年) | 無  |
| 10  | 支那語文法                    | 石山福治                | 文求堂     | 明治41年(1908年) | 無  |
| 11  | 支那語動詞形容詞用法               | 皆川秀孝                | 文求堂     | 明治41年(1908年) | 無  |
| 12  | 支那語要解                    | 寺田由衛                | 寺田由衛    | 明治42年(1909年) | 無  |

【表2】に示すように、12点の文法書において「可能性」の“会”<sup>(11)</sup>について言及

(7) 書名の全称は『支那語助辞用法:附・応用問題及答解』である。

(8) 原本において『注釈日清語学金針』と表記しているが、「国立国会図書館デジタルコレクション」の「書誌情報」においては「日清語学金針：注釈」と記している。本稿で扱う明治期の中国語関係書の書名表記は「国立国会図書館デジタルコレクション」の「書誌情報」の表記に従うこととする。

(9) 「等」は共著を標し、詳細に関しては「調査資料」にて提示する。

(10) 『初歩支那語独修書』は明治38年に上巻が、明治39年に下巻が出版され、上巻では動詞について“有”と“是”までのみ扱えており、下巻に“会”について言及されている。

(11) 明治期の中国語関係書における“会”は“會”を用いるが、本稿では“会”で表記する。

しているものは3点のみである。

『支那語学楷梯 (No.1)』では、“会”について「知ル」と解釈し、「デキル」「書ケル」の2例を提示している。『支那語異同弁 (No.3)』では“会走”と“能走”の違いについて解釈し、“会”を「技量を意味す」と述べている。『支那語動字用法 (No.4)』では動詞毎に例文を挙げながら説明しているが、“会”についての説明はない。『清語文典 (No.5)』も同様“会”について言及されておらず、『日清語学金針：注釈 (No.6)』では、「會……デキマス」「不會……デキマセン」と記されている。

『初歩支那語独修書 (No.9)』では「可能、不可能の助動詞「會、不會」」のように品詞別に解析しているが、「絶対的能力の有無を表す」助動詞として「することが出来る／出来ない」という意を表すと述べている。さらに、本稿の3節で紹介した先行研究の説に関係する未来を表す助動詞は“要”のみ、予定の意志を表す助動詞は“打算”のみ挙げられ、“会”については述べていない。

『支那語文法 (No.10)』では“会”について「主動詞ノ働きガ可能ナルコトヲ表ハス」と解釈しており、『支那語動詞形容詞用法 (No.11)』では「できる (成し能あたふ意)」と解釈され、『支那語要解 (No.12)』では「會……能ふ」と記されている。

『官話文法 (No.7)』は日本語が使用されておらず、日本語解釈もなければ、中国語の解釈もない。“会”という項目に「会う」「できる」のような様々な意味で用いる“会”を使用した単語や短文を羅列するのみである。その中には、“怎么会丢了昵 (どうして失くしたのですか\_筆者訳)”という「可能性」に関する例文が1例見られる。

『清語正規 (No.8)』では、“会”について「(二) は「ソナナ筈ハナイ」と云ふ場合の「筈」に當る意味を有す」と解釈しており、この「第二の場合に属」する例を以下のように提示している。

(1) 您会说德国话不会<sup>(12)</sup> (あなたはドイツ語を話すことが出来ますか\_筆者訳<sup>(13)</sup>)  
p.174

(2) 我们都是不会骑马 (私たちは馬に乗れません\_筆者訳) p.174

解釈は「可能性」について論じているものの、例文は「能力」に関するもので、著者が“会”について理解しているとは言えない。

(12) 原文において旧漢字で印字されている例文を本稿では筆者により簡体字に改める。

(13) 本稿で調査する関係書は中国語文のみのものがあり、日本語訳文がないものに関しては筆者が適宜日本語に訳する。

一方、『支那語助辞用法 (No.2)』では“会”について能力のほか、「(2) (そんな筈はない) (そんなわけはない) との意」と解釈し、下記のように「可能性」に関する例文を提示している。

- (3) 怎么这么好房子会租不出去呢 (何うしてこんな好い家が借手のないことがあるものですか) p.31
- (4) 他是个用兵的好手，怎么会打这么一个大败仗呢 (渠は兵術の名人であるのに何うしてこんな大敗をとることがありませう) p.31

この文法書は唯一解釈も例文も“会”の「可能性」用法について正確に述べているものであるが、「注意」には「(2) 場合の用法にして尚會得するに難くんば、学者幸に先進に就て詳細の口授を受けられんことを」と記載されている。

このように、明治期の中国語文法書一少なくとも明治28年から明治42年までの文法書は“会”の「可能性」について正確に論じているものは数少なく、唯一正確に論じているものも“会”の「可能性」用法について「あってもなくてもよい」立場にあり、“会”の「可能性」用法が重視されていないことが観察できる。

## 6. 「教科書」における“会”について

本稿では漢字の発音や四声についての説明があり、適宜例文も提示しているものを「教科書」とするが、これらの「教科書」は必ずしも解釈があるとは限らない。むしろ、基本的な中国語知識と発音を説明し、単語と例文を単に羅列しているものの方が多く見られる。本稿における「教科書」を【表3】に示す。なお、“会”の「可能性」用法の用例数を示す。

【表3】「教科書」における「可能性」の“会”の現れ方

| No. | 教科書            | 著者 / 編者 | 出版社 / 者 | 出版年           | 用例数 |
|-----|----------------|---------|---------|---------------|-----|
| 13  | 支那語学速修案内: 日英対照 | 川辺紫石    | 井口松之助   | 明治28年 (1895年) | 0   |
| 14  | 支那語自在          | 豊国義孝    | 獅子吼会    | 明治28年 (1895年) | 0   |
| 15  | 官話輯要           | 宮島大八    | 哲学書院    | 明治30年 (1897年) | 1   |
| 16  | 支那語独習書         | 宮島大八    | 善隣書院    | 明治33年 (1900年) | 0   |



|    |                          |       |       |              |   |
|----|--------------------------|-------|-------|--------------|---|
| 17 | 清語教科書                    | 孟繁英   | 村上書店  | 明治35年(1902年) | 0 |
| 18 | 亜細亜言語集 支那官話部 増訂          | 広部精   | 青山堂   | 明治35年(1902年) | 5 |
| 19 | 中等清語教科書                  | 西島良爾等 | 石塚松雲堂 | 明治37年(1904年) | 2 |
| 20 | 官話急就篇                    | 宮島大八  | 善隣書院  | 明治37年(1904年) | 1 |
| 21 | 初歩清語教科書                  | 楊学泗   | 松雲堂   | 明治38年(1905年) | 0 |
| 22 | 支那語官話編                   | 太田北水  | 北上屋   | 明治38年(1905年) | 0 |
| 23 | 新編支那語独修                  | 三原好太郎 | 岡崎屋   | 明治38年(1905年) | 0 |
| 24 | 支那語学案内:日英対照官話指南          | 川辺紫石  | 一二三館  | 明治38年(1905年) | 0 |
| 25 | 新編清語教程                   | 西島良爾  | 石塚猪男蔵 | 明治39年(1906年) | 2 |
| 26 | 北京官話万物声音 <sup>(14)</sup> | 瀬上恕治  | 市山重作  | 明治39年(1906年) | 1 |
| 27 | 日清会話捷徑:北京官話              | 甲斐靖   | 弘成館   | 明治39年(1906年) | 0 |

【表3】に示すように、15点の教科書に「可能性」を表す“会”を用いた例文が見られるものは6点のみで、用例数は12例である。“会”そのものが少ないわけではないが、「可能性」用法が普及しているとは言い難い。さらに、12例のうち9例が以下のように“怎么会”で用いられている。

(5) 哎呀你怎么会落在这般光景呢(オヤマーお前はどをして此様に落ぶれたのだ)  
『北京官話万物声音』p.22

(6) 怎么会没呢(どうして無くなったのですか\_筆者訳)  
『亜細亜言語集 支那官話部 増訂』p.125

呂(2003)は“会”について、「③可能性がある：普通未来の可能性を表す。過去・現在の可能性を示してもよい」と解釈し「他怎么会知道的? 彼はどうして知っているんだろう」という例文を示している。“怎么会”は過去に発生したことに對して「発生するはずがないことがなぜ発生したのか」という問いであり、「可能性」用法であることは確かであるが、本稿で扱う「教科書」はこれを理解したうえで、“会”を使用しているとは考えられず、「どうして」という意で便宜的に“怎么会”を使用したように見える。

これらを除くと「可能性」用法の“会”を使用した例文はわずか3例で、例文

(14) 書名の全称は『北京官話万物声音:附・感投詞及發音須知』である。

(7) は後で言及する同一著者の「会話書」にも同じ文<sup>(15)</sup>が見られる。

(7) 那个母鸡天天会下金蛋，一定是满肚子里都是金子了（あの鶏は毎日金の卵を産んでいるので、お腹の中には金がいっぱいあるに違いない\_筆者訳）

『中等清語教科書』p.105

例文(7)の“会”は「毎日卵が産まれる」という現在を含むある期間内で繰り返し生起する出来事を表しており、「可能性」用法の一種に思われる。このような場合に用いられる“会”に対応する日本語表現はなかなか見当たらない。

また、下記の2例は同じ教科書に見られ、例文(8)は過去か未来かに限定されず、脱時間化した超時の場合(王2016)の出来事を述べている。これは「運気が普通の人の成功には常にトラブルが付随している」というポテンシャルな事態で、話し手にとってはある種の必然的なことであり、いま発生していなくても、発生する「可能性」が非常に高いという話し手の思いが“会”により表されている。

(8) 时运若平常，样样儿总不着，不论什么事，眼看着要成，偏会又生出扭儿来（運気が普通であれば、何事も起こらないし、どんな事でも、成功が見えてきたとしても、またトラブルが発生するものだ\_筆者訳）

『亜細亜言語集 支那官話部 増訂』p.12

例文(9)は未来の可能性を表しており、まだ家は壊れていないが、このままで家が壊れる「恐れがある」という話し手の考えが“会”により表現されている。

(9) 若是这么惯了，不但会破家，而且也折福（もしこれが慣れてきたら、家が壊れるだけではなく、福も損なう\_筆者訳）

『亜細亜言語集 支那官話部 増訂』p.25

これらの例文は「可能性」の“会”について正確に理解し、使用していると言える。

このように、明治期の教科書は「可能性」の“会”を取り上げたものは極一部であり、理由を問う“怎么会”は使用されているものの、“会”の「可能性」について理解していると言える「教科書」は厳密には1点のみである。

---

(15) 西島良爾(1902)『清語読本』において同じ文が見られる。

## 7. 「会話書」における“会”について

本稿では、単語が多少記載されていても、会話文がメインとなるものを「会話書」に分類する。会話文のみを羅列しているものもあれば、不特定多数の人間の間に生じるやりとりを記載しているものもある。また、書名に「読本」という表現を用いる関係書が見られるが、内容が会話文になっているため「会話書」に分類する。本稿における「会話書」を【表4】に示す。なお、“会”の「可能性」用法の用例数と「能力」用法の用例数をそれぞれ「可能性」欄と「能力」欄に示す。

【表4】「会話書」における「可能性」の“会”の現れ方

| No. | 会話書                         | 著者／編者 | 出版社／者    | 出版年          | 可能性 | 能力 |
|-----|-----------------------------|-------|----------|--------------|-----|----|
| 28  | 官話指南 <sup>(16)</sup>        | 呉啓太等  | 楊竜太郎     | 明治15年(1882年) | 10  | 9  |
| 29  | 英和支那語学自在                    | 川崎華   | 岩藤錠太郎等   | 明治18年(1885年) | 0   | 3  |
| 30  | 支那語独習書 第1編                  | 谷信近   | 支那語独習学校  | 明治22年(1889年) | 0   | 2  |
| 31  | 実用支那語 正篇                    | 中島謙吉  | 尚武学校編纂部  | 明治27年(1894年) | 0   | 2  |
| 32  | 支那語学独修便覧：国語対照               | 福井太一  | 福井太一     | 明治28年(1895年) | 0   | 5  |
| 33  | 支那語独案内：軍用商業会話自在             | 星文山人  | 柏原政次郎    | 明治28年(1895年) | 0   | 2  |
| 34  | 談論新編：北京官話                   | 金国璞等  | 平岩道知     | 明治31年(1898年) | 0   | 1  |
| 35  | 士商叢談便覧：北京官話 <sup>(17)</sup> | 金国璞   | 文求堂      | 明治34年(1901年) | 2   | 7  |
| 36  | 貿易叢談：東文翻訳北京官話               | 徐東泰等  | 文尚堂      | 明治34年(1901年) | 0   | 1  |
| 37  | 清語読本                        | 西島良爾  | 石塚猪男蔵    | 明治35年(1902年) | 10  | 12 |
| 38  | 新編支那語会話読本                   | 青柳篤恒  | 早稲田大学出版部 | 明治36年(1903年) | 0   | 7  |
| 39  | 官話篇                         | 宮島大八  | 善隣書院     | 明治36年(1903年) | 6   | 20 |
| 40  | 清語会話速成                      | 東洋学会  | 又間精華堂    | 明治37年(1904年) | 0   | 2  |
| 41  | 兵事会話：清語速習                   | 宮島大八  | 善隣書院     | 明治37年(1904年) | 0   | 1  |
| 42  | 清語三十日間速成                    | 西島良爾  | 青木嵩山堂    | 明治37年(1904年) | 0   | 2  |
| 43  | 官話時文問答                      | 宮嶋吉敏  | 善隣書院     | 明治37年(1904年) | 0   | 1  |

(16) 明治19年に2版が、明治36年に改訂版が出版されているが、本稿では明治15年のものを対象とする。

(17) 『士商叢談便覧：北京官話』は上巻と下巻に分けられるが、本稿では1点として分析する。

|    |                                 |        |       |              |   |    |
|----|---------------------------------|--------|-------|--------------|---|----|
| 44 | 清語読本 後編                         | 東方語学校  | 金港堂   | 明治38年(1905年) | 4 | 2  |
| 45 | 日清語入門：較対無訛<br>統 <sup>(18)</sup> | 松雲程等   | 田中慶太郎 | 明治38年(1905年) | 5 | 21 |
| 46 | 官話速成篇 <sup>(19)</sup>           | 張毓靈等   | 東亜堂   | 明治38年(1905年) | 1 | 9  |
| 47 | 北京官話常言用例                        | 小路真平等  | 文求堂   | 明治38年(1905年) | 0 | 2  |
| 48 | 通訳必携：北京官話                       | 馬紹蘭等   | 金刺芳流堂 | 明治38年(1905年) | 0 | 2  |
| 49 | 清語新会話                           | 山崎久太郎  | 青木嵩山堂 | 明治39年(1906年) | 0 | 3  |
| 50 | 最新清語捷徑                          | 西島良爾   | 青木嵩山堂 | 明治39年(1906年) | 1 | 8  |
| 51 | 北京官話家言類集                        | 馮世傑等   | 積善館   | 明治39年(1906年) | 4 | 7  |
| 52 | 清国風俗会話篇：北京<br>官話                | 馮世傑等   | 文求堂   | 明治39年(1906年) | 2 | 6  |
| 53 | 清国民俗土産問答：北京<br>官話               | 文求堂編集局 | 文求堂   | 明治39年(1906年) | 2 | 0  |
| 54 | 官話応酬新篇                          | 渡俊治    | 文求堂   | 明治40年(1907年) | 0 | 4  |
| 55 | 官話問答新篇：日文対照                     | 瀬上恕治   | 東亜公司  | 明治40年(1907年) | 4 | 1  |
| 56 | 二十世紀清語読本                        | 李文権    | 文求堂   | 明治43年(1910年) | 2 | 0  |

【表4】に示すように、「会話書」における“会”も「可能性」用法が少なく、「能力」用法のほうが多い。「能力」用法の用例数が142例であるのに対して、「可能性」用法の用例数は53例である。その中33例が“怎么会”として使用され、『最新清語捷徑(No.50)』の1例は例文(7)と同じ文である。また、日本語訳文がある例文を見ると、

(10) 哈奇怪奇怪怎么不疼不痒痒的就会出来吗(は一奇怪な事ですな痛くも痒くもなしに出て来ることが出来ましたか)『北京官話家言類集』p.27

(11) 那卖牛羊的不会和他辩论这个理么(其牛羊商人は彼に向い其理屈を言へないので御座いますか)『官話問答新篇：日文対照』p.106

のように、中国語文で「可能性」用法の“会”が使用されているのは確かであるが、日本語の訳文には「出来」や「可能動詞」のような可能表現の標識が見られる。

次の例文を見ると、中国語文のみでは“会”が「能力」用法で用いられているか

(18) 明治40年に2版が出版されているが、明治38年のものを対象とする。

(19) 『官話速成篇』には日本語訳文がないが、『東語速成篇：官話速成篇総訳』はその日本語訳文が記載されているものである。

「可能性」用法で用いられているか定かではないが、日本語訳文においては「可能性」用法の意味で訳していると言える。

(12) 不会上井里打水去 (井戸の水を汲むと云ふ譯にも行きませぬかな)

『清国風俗会話篇：北京官話』p.106

このように、明治期の会話書における“会”は「能力」用法が「可能性」用法をはるかに上回っており、「可能性」用法で用いられている場合であっても“怎么会”がほとんどで、また、それを除いた「可能性」用法の“会”を日本語に訳す際、「能力」用法にとらわれている部分が残っていることが観察できる。

## 8. 「読本」における“会”について

本稿では、中国の昔話や『伊蘇普喻言：北京官話』のように物語が記載されているものを「読本」に分類する。本稿で扱う「読本」を【表5】に示し、“会”の「可能性」用法の用例数と「能力」用法の用例数をそれぞれ「可能性」欄と「能力」欄に示す。

【表5】「読本」における「可能性」の“会”の現れ方

| No. | 読本            | 著者/編者 | 出版社/者      | 出版年          | 可能性 | 能力 |
|-----|---------------|-------|------------|--------------|-----|----|
| 57  | 伊蘇普喻言：北京官話    | 中田敬義  | 渡部温        | 明治12年(1879年) | 3   | 6  |
| 58  | 今古奇観：北京官話 第1編 | 金国璞   | 文求堂        | 明治37年(1904年) | 11  | 4  |
| 59  | 今古奇観：北京官話 第2編 | 金国璞   | 文求堂        | 明治37年(1904年) | 2   | 1  |
| 60  | 虎頭蛇尾：北京官話     | 金国璞   | 北京日本人清語同学会 | 明治40年(1907年) | 3   | 0  |
| 61  | 中外蒙求：北京官話     | 張廷彦   | 文求堂        | 明治44年(1911年) | 1   | 2  |

【表5】に示すように、「可能性」用法の用例数が20例であるのに対して「能力」用法の用例数は13例である。その中、“怎么会”が9例見られる。

また、用例数から見ると、『中外蒙求：北京官話 (No.61)』を除く「読本」において中国人著者の方 (No.58, 59, 60) は「可能性」用法の用例数が「能力」用法の用例数を上回るが、日本人著者の場合 (No.57) 「能力」用法の用例数が多い。実際の運用では“会”の「可能性」用法が圧倒的に多く使われているという指摘(羅2021)も

あるが、本稿における「文法書」「教科書」「会話書」の“会”の使用状況を見ると、「読本」で観察できる状況が異例と思われる。

## 9. 考察

このように、明治期の中国語関係書における“会”に関して「可能性」用法が普及していないことは確かであるが、現代においても状況は大きく変わらない。羅 (2021) の調査では、「日本で出版された初級レベルの中国語教科書を22冊<sup>(20)</sup>調べたところ、“会”の可能性を表す文法的意味に言及したのは4冊のみであり、同じく日本で出版された中級レベルの教科書を21冊調べたところ、多くの教科書は“会”が可能性を表すという内容の提示に留まる」と述べている。つまり、“会”の「可能性」用法についてこの百年余、日本で出版されている中国語教育関係書の取り上げ状況から、実際の運用では「可能性」用法が圧倒的に多く使われている(羅2021)にも関わらず、言語学習上の優先順位が低いと言えよう。“会”の「可能性」用法は従来存在するが(少なくとも本稿では1879年の『伊蘇普噲言:北京官話』から存在している)、多く議論されていないようである。

本稿で考察した調査資料及び『清語会話案内』の上巻と下巻に見る「可能性」用法の“会”の現れ方を年代別に配列し【表6】に示す。なお、「文法書」については言及の有無を示し、その他の関係書については「可能性」用法の用例数を示す。

【表6】明治期の中国語関係書における「可能性」の“会”の現れ方

| No. | 中国語関係書     | 著者/編者 | 出版社/者   | 出版年          | 有無/用例数 |
|-----|------------|-------|---------|--------------|--------|
| 57  | 伊蘇普噲言：北京官話 | 中田敬義  | 渡部温     | 明治12年(1879年) | 3      |
| 28  | 官話指南       | 呉啓太等  | 楊竜太郎    | 明治15年(1882年) | 10     |
| 29  | 英和支那語学自在   | 川崎華   | 岩藤錠太郎等  | 明治18年(1885年) | 0      |
| 30  | 支那語独習書 第1編 | 谷信近   | 支那語独習学校 | 明治22年(1889年) | 0      |
| 31  | 実用支那語 正篇   | 中島謙吉  | 尚武学校編纂部 | 明治27年(1894年) | 0      |
| 1   | 支那語学楷梯     | 中島長吉  | 小林新兵衛   | 明治28年(1895年) | 無      |

(20) 本稿では関係書を数える際「点」を用いるが、羅 (2021) では「冊」を使用しており、引用文であるため、改めないことにする。

|    |                 |            |          |              |    |
|----|-----------------|------------|----------|--------------|----|
| 13 | 支那語学速修案内：日英対照   | 川辺紫石       | 井口松之助    | 明治28年(1895年) | 0  |
| 14 | 支那語自在           | 豊国義孝       | 獅子吼会     | 明治28年(1895年) | 0  |
| 32 | 支那語学独修便覧：国語対照   | 福井太一       | 福井太一     | 明治28年(1895年) | 0  |
| 33 | 支那語独案内：軍用商業会話自在 | 星文山人       | 柏原政次郎    | 明治28年(1895年) | 0  |
| 15 | 官話輯要            | 宮島大八       | 哲学書院     | 明治30年(1897年) | 1  |
| 34 | 談論新編：北京官話       | 金国璞等       | 平岩道知     | 明治30年(1898年) | 0  |
| 16 | 支那語独習書          | 宮島大八       | 善隣書院     | 明治33年(1900年) | 0  |
| —  | 清語会話案内上下        | 西島良爾       | 青木嵩山堂    | 明治33年(1900年) | 0  |
| 35 | 士商叢談便覧：北京官話     | 金国璞        | 文求堂      | 明治34年(1901年) | 2  |
| 36 | 貿易叢談：東文翻訳北京官話   | 徐東泰等       | 文尚堂      | 明治34年(1901年) | 0  |
| 2  | 支那語助辞用法         | 青柳篤恒       | 文求堂      | 明治35年(1902年) | 有  |
| 17 | 清語教科書           | 孟繁英        | 村上書店     | 明治35年(1902年) | 0  |
| 18 | 亜細亜言語集 支那官話部増訂  | 広部精        | 青山堂      | 明治35年(1902年) | 5  |
| 39 | 清語読本            | 西島良爾       | 石塚猪男蔵    | 明治35年(1902年) | 10 |
| 37 | 官話篇             | 宮島大八       | 善隣書院     | 明治36年(1903年) | 6  |
| 40 | 新編支那語会話読本       | 青柳篤恒       | 早稲田大学出版部 | 明治36年(1903年) | 0  |
| 3  | 支那語異同弁          | 原口新吉       | 文求堂      | 明治37年(1904年) | 無  |
| 4  | 支那語動字用法         | 張廷彦        | 文求堂      | 明治37年(1904年) | 無  |
| 19 | 中等清語教科書         | 西島良爾等      | 石塚松雲堂    | 明治37年(1904年) | 2  |
| 20 | 官話急就篇           | 宮島大八       | 善隣書院     | 明治37年(1904年) | 1  |
| 38 | 清語会話速成          | 東洋学会       | 又間精華堂    | 明治37年(1904年) | 0  |
| 41 | 兵事会話：清語速習       | 宮島大八       | 善隣書院     | 明治37年(1904年) | 0  |
| 42 | 清語三十日間速成        | 西島良爾       | 青木嵩山堂    | 明治37年(1904年) | 0  |
| 43 | 官話時文問答          | 宮嶋吉敏       | 善隣書院     | 明治37年(1904年) | 0  |
| 58 | 今古奇観：北京官話第1編    | 金国璞        | 文求堂      | 明治37年(1904年) | 11 |
| 59 | 今古奇観：北京官話第2編    | 金国璞        | 文求堂      | 明治37年(1904年) | 2  |
| 5  | 清語文典            | 信原継雄       | 青木嵩山堂    | 明治38年(1905年) | 無  |
| 6  | 日清語学金針：注釈       | 馬紹蘭等       | 日清語学会    | 明治38年(1905年) | 無  |
| 7  | 官話文法            | 張廷彦, 田中慶太郎 | 救堂書屋     | 明治38年(1905年) | 有  |
| 21 | 初歩清語教科書         | 楊学泗        | 松雲堂      | 明治38年(1905年) | 0  |
| 22 | 支那語官話編          | 太田北水       | 北上屋      | 明治38年(1905年) | 0  |

|    |                 |          |            |              |   |
|----|-----------------|----------|------------|--------------|---|
| 23 | 新編支那語独修         | 三原好太郎    | 岡崎屋        | 明治38年(1905年) | 0 |
| 24 | 支那語学案内：日英対照官話指南 | 川辺紫石     | 一二三館       | 明治38年(1905年) | 0 |
| 45 | 日清語入門：較対無訛 続    | 松雲程等     | 田中慶太郎      | 明治38年(1905年) | 5 |
| 46 | 官話速成篇           | 張毓靈等     | 東亜堂        | 明治38年(1905年) | 1 |
| 47 | 北京官話常言用例        | 小路真平等    | 文求堂        | 明治38年(1905年) | 0 |
| 48 | 通訳必携：北京官話       | 馬紹蘭等     | 金刺芳流堂      | 明治38年(1905年) | 0 |
| 44 | 清語読本 後編         | 東方語学校    | 金港堂        | 明治38年(1905年) | 4 |
| 8  | 清語正規            | 清語学堂速成科編 | 文求堂        | 明治39年(1906年) | 有 |
| 9  | 初歩支那語独修書        | 原口新吉     | 広報社        | 明治39年(1906年) | 無 |
| 25 | 新編清語教程          | 西島良爾     | 石塚猪男蔵      | 明治39年(1906年) | 2 |
| 26 | 北京官話万物声音        | 瀬上恕治     | 市山重作       | 明治39年(1906年) | 1 |
| 27 | 日清会話捷徑：北京官話     | 甲斐靖      | 弘成館        | 明治39年(1906年) | 0 |
| 49 | 清語新会話           | 山崎久太郎    | 青木嵩山堂      | 明治39年(1906年) | 0 |
| 50 | 最新清語捷徑          | 西島良爾     | 青木嵩山堂      | 明治39年(1906年) | 1 |
| 51 | 北京官話家言類集        | 馮世傑等     | 積善館        | 明治39年(1906年) | 4 |
| 52 | 清国風俗会話篇：北京官話    | 馮世傑等     | 文求堂        | 明治39年(1906年) | 2 |
| 53 | 清国民俗土産問答：北京官話   | 文求堂編集局   | 文求堂        | 明治39年(1906年) | 2 |
| 54 | 官話応酬新篇          | 渡俊治      | 文求堂        | 明治40年(1907年) | 0 |
| 55 | 官話問答新篇：日文対照     | 瀬上恕治     | 東亜公司       | 明治40年(1907年) | 4 |
| 60 | 虎頭蛇尾：北京官話       | 金国瓊      | 北京日本人清語同学会 | 明治40年(1907年) | 3 |
| 10 | 支那語文法           | 石山福治     | 文求堂        | 明治41年(1908年) | 無 |
| 11 | 支那語動詞形容詞用法      | 皆川秀孝     | 文求堂        | 明治41年(1908年) | 無 |
| 12 | 支那語要解           | 寺田由衛     | 寺田由衛       | 明治42年(1909年) | 無 |
| 56 | 二十世紀清語読本        | 李文権      | 文求堂        | 明治43年(1910年) | 2 |
| 61 | 中外蒙求：北京官話       | 張廷彦      | 文求堂        | 明治44年(1911年) | 1 |

【表6】に示すように、『清語会話案内』が出版されるまでの関係書を見ると、『伊蘇普噲言：北京官話 (No.57)』、『官話指南 (No.28)』、『官話輯要 (No.15)』の3点に“会”の「可能性」用法の用例が見られ、この3点の関係書の共通点として中国語文のみのものであり、日本語訳文が付していないことが挙げられる。また、『清語会話案内』が出版された翌年の『士商叢談便覧：北京官話 (No.35)』にも「可



能性」用法の用例が見られるが、この関係書も同じく中国語文のみのものである。つまり、明治期の中国語関係書において「可能性」の“会”が認識され、日本語で解釈することを試みた最初の関係書は明治35(1902)年に出版された『支那語助辞用法 (No.2)』である。

少なくとも明治12(1879)年(『伊蘇普噲言:北京官話 (No.57)』)から見られる「可能性」の“会”が、明治35(1902)年にはじめて日本語で解釈されるようになったが、まだ普及されたと言い難い状況が生じる理由を挙げるためにまず下記の例文を見ると、

(13) 天下竟会有这样儿的冤屈的事『今古奇観：北京官話 第2編』p.81

(13)’ 天下竟有这样儿的冤屈的事

(13) と、(13) から“会”を外した (13)’ は、ともに「この世にこのような冤罪があるとは(筆者訳)」に訳すことができ、同じことを語っている。強いて言えば、“会”がある文のほうが話し手のより繊細な感情を表すことができる。例文 (13) は“会”によりこのような冤罪は「あり得ない」というニュアンスが表され、この“会”を日本語に直訳するのは難しい。下記の例文もこの場合に属すると言える。

(14) 没想到会叫一个小孩子把你算计了(君がこんな子供にはめられるとは思えなかった\_筆者訳)『今古奇観：北京官話 第1編』p.108

(15) 想不到这么小的孩子会有这么大的智谋(こんなに幼い子供にこれほどの知恵があるとは思えられない\_筆者訳)『今古奇観：北京官話 第1編』p.126

例文 (14) は「子供にはめられるとはあり得ない」、例文 (15) は「子供にこれほどの知恵があるとはあり得ない」という「可能性が非常に低い出来事がまさか発生したとは」という話し手の意外な感情を“没想到”，“想不到”と共に表している。これらの“会”も日本語に直訳するのは難しい。

また、下記例文のように“会”と対応する日本語表現は語句に内在していると考えられる場合が存在する。これらの文に見る“会”は「可能性」意味から派生し、羅(2021)で述べている「意志+可能性」の意味に当たるとされる。この場合、“会”は意志動詞の前に現れ、文の主語は人間であり、主語があることをしたい意志があるため、そのことが起こる可能性があるという解釈ができるが、そのほ

とんどが日本語の動詞無標形式<sup>(21)</sup>と対応しているため、“会”の働きが重視されていないと思われる。例文(16)の子供は「聞く」意志がないため、「聞く」という事態が発生する可能性はないと理解ができ、“会聞”と「聞く」が対応していると思われるが、動詞無標形式であるため、“会”に対応する日本語表現は見出し難い。

- (16) 这个孩儿，不但瞧不出什么来，连闻也不会闻（この子供は、何かに気づくどころか、聞きもしない\_筆者訳）『伊蘇普喻言：北京官話』より p.103

一方、意志動詞以外の表現の前の“会”の否定表現である“不会”は、「可能性」がゼロに極めて近いという意味を表しているため、日本語の「はずがない」「わけがない」のような表現との対応は見出しやすい。数少ないが、明治期の中国語関係書で“会”の「可能性」用法について言及している解釈のほとんどが「筈に當る」と述べているのは“不会”の解析から導き出したと考えられる。

- (17) 账目是一定不会错的。（帳簿が間違うはずはない \_筆者訳）

『二十世紀清語読本』 p.64

- (18) 只要您认得准。不会上当的。（見分けさえできれば、騙されるわけがない \_筆者訳）『二十世紀清語読本』 p.103

## 10. おわりに

本稿は、金(2022)における指摘をより多くの明治期の文献で検討するために「国立国会図書館デジタルコレクション」で閲覧できる61点の中国語関係書を調査資料に“会”の使用状況および用例用法を確認し、当時「可能性」を意味する“会”がまだ普及していないという結論に辿り着いた。

「文法書」では『支那語助辞用法 (No.2)』にのみ、「可能性」用法の“会”について言及し、かつ、正しい例文を示している。「教科書」では『亜細亜言語集 支那官話部 増訂 (No.18)』のみ、“会”の「可能性」について理解していると言える。「会話書」における“会”は「能力」用法が「可能性」用法をはるかに上回っており、「可

(21) 安達(2002)では、動詞無標形式は本来意志を表す形式ではなく、話し手の未実現の意志的行為に言及する場合に意志の側面が前面に出ることがあると述べている。

能性」用法の“会”を日本語に訳す際、「能力」用法にとらわれている部分が残っていることが観察できる。

「読本」では「可能性」用法の用例数が「能力」用法の用例数をやや上回るものの、日本人著者の場合「能力」用法の用例数が多い。

“会”の「可能性」用法の学習者への普及が難しいことについて、「可能性」を表す“会”の直訳が難しいことと、また、日本語に対応する表現が見出し難いこととの2つの理由を挙げたい。さらに、本稿における調査により“会”が現在の「可能性」として解釈できるようにまで至った経緯について、まずは「どうして」の“怎么会”が定着し、その後「はずがない」の“不会”についての解析が深まり、最後に“会”の「可能性」用法という解釈に辿り着いたとする推測が可能であろうが、これについては慎重を期してさらなる調査を試みたいと思う。

## 参考文献

### 日本語文献

- 安達太郎 (2002) 「意志・勧誘のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
- 大江元貴 (2015) 「中国語の可能形式“能”“会”“可以”—「可能」概念を構成する力に着目した分析—」『文藝言語研究. 言語篇』67 筑波大学大学院人文社会科学研究科 文芸・言語専攻
- 王 其莉 (2016) 『判断のモダリティに関する日中対照研究』ひつじ書房
- 金 敬玲 (2022) 「近代中国語会話書『清語会話案内』における能願動詞について」『国学院大学大学院紀要. 文学研究科』54 国学院大学大学院
- 黄麗華 (1995) 「中国語の可能表現「能」「会」「可以」」東京都立大学国語学研究室『日本語研究』15
- 園田博文 (2017) 「『官話急就篇』『急就篇』訳述書4種の日本語—近代日本語資料としての性質と活用法について—」『山形大学紀要〈教育科学〉』第16巻 第4号
- 孫 樹喬 (2018) 「意志のモダリティを表す「会」の意味機能」『文学部論集』第102号 佛教大学
- 孫 樹喬 (2021) 「日中対照から見る未来について語る表現：“会”を中心として」『コミュニケーレ』10号 同志社大学グローバル・コミュニケーション学会
- 羅 華 (2021) 「“能”“会”“可以”の教授法についての一考察」『APU言語研究論叢』6巻
- 六角恒廣 (2001) 『中国語関係書目(増補版)』不二出版
- 呂 叔湘 (2003) 『中国語文法用例辞典—《現代漢語八百詞増訂本》日本語版』東方書店

### 中国語文献

- 侯瑞芬 (2009) 〈从力量与障碍看现代汉语情态动词“可以”“能”“会”〉北京大学汉语语言学研究中心《语言学论丛》第四十辑
- 鲁晓昆 (2004) 《现代汉语基本助动词语义研究》中国社会科学出版社

## 調査資料<sup>(22)</sup>

- 中田敬義 (1879)『伊蘇普諭言：北京官話』 渡部温  
 呉啓太、鄭永邦 (1882)『官話指南』 楊竜太郎  
 川崎華 (1885)『英和支那語学自在』 岩藤錠太郎等  
 谷信近 (1889)『支那語独習書 第1編』 支那語独習学校  
 中島謙吉 (1894)『実用支那語 正篇』 尚武学校編纂部  
 中島長吉 (1895)『支那語学楷梯』 小林新兵衛  
 川辺紫石 (1895)『支那語学速修案内：日英対照』 井口松之助  
 豊国義孝 (1895)『支那語自在』 獅子吼会  
 福井太一 (1895)『支那語学独修便覧：国語対照』 福井太一  
 星文山人 (1895)『支那語独案内：軍用商業会話自在』 柏原政次郎  
 宮島大八 (1897)『官話輯要』 哲学書院  
 金国環、平岩道知 (1898)『談論新編：北京官話』 平岩道知  
 宮島大八 (1900)『支那語独習書』 善隣書院  
 徐東泰、井上孝之助 (1901)『貿易叢談：東文翻訳北京官話』 文尚堂  
 金国環 (1901)『士商叢談便覧：北京官話 上』 文求堂  
 金国環 (1902)『士商叢談便覧：北京官話 下』 文求堂  
 青柳篤恒 (1902)『支那語助辞用法：附・応用問題及答解』 文求堂  
 孟繁英 (1902)『清語教科書』 村上書店  
 広部精 (1902)『亜細亜言語集 支那官話部 増訂』 青山堂  
 西島良爾 (1902)『清語読本』 石塚猪男蔵  
 宮島大八 (1903)『官話篇』 善隣書院  
 青柳篤恒 (1903)『新編支那語会話読本』 早稲田大学出版部  
 原口新吉 (1904)『支那語異同弁』 文求堂  
 張廷彦 (1904)『支那語動字用法』 文求堂  
 西島良爾、林達道 (1904)『中等清語教科書』 石塚松雲堂  
 宮島大八 (1904)『官話急就篇』 善隣書院  
 東洋学会編 (1904)『清語会話速成』 又間精華堂  
 宮島大八 (1904)『兵事会話：清語速習』 善隣書院  
 西島良爾 (1904)『清語三十日間速成』 青木嵩山堂  
 宮嶋吉敏 (1904)『官話時文問答』 善隣書院  
 金国環 (1904)『今古奇観：北京官話 第1編』 文求堂  
 金国環 (1904)『今古奇観：北京官話 第2編』 文求堂  
 信原継雄 (1905)『清語文典』 青木嵩山堂  
 馬紹蘭、杉房之助、謝介石 (1905)『日清語学金針：注釈』 日清語学会  
 張廷彦、田中慶太郎 (1905)『官話文法』 救堂書屋  
 楊学泗 (1905)『初歩清語教科書』 松雲堂  
 太田北水 (貞吉) (1905)『支那語官話編』 北上屋  
 三原好太郎 (1905)『新編支那語独修』 岡崎屋

(22) 出版年度順に示す。

- 川辺紫石 (1905)『支那語学案内：日英対照官話指南』 一二三館  
松雲程、服部邦久 (1905)『日清語入門：較対無訛 続』 田中慶太郎  
張毓靈、宮沢文次郎 (1905)『官話速成篇 (東亜同文叢書：第1編)』 東亜堂  
小路真平、茂木一郎 (1905)『北京官話常言用例』 文求堂  
馬紹蘭、足立忠八郎 (1905)『通訳必携：北京官話』 金刺芳流堂  
東方語学校 (1905)『清語読本 後編』 金港堂  
原口新吉 (1905)『初歩支那語独修書 上』 広報社  
原口新吉 (1906)『初歩支那語独修書 下』 広報社  
清語学堂速成科編 (1906)『清語正規』 文求堂  
西島良爾 (1906)『新編清語教程』 石塚猪男蔵  
瀬上恕治 (1906)『北京官話万物声音：附・感投詞及発音須知』 市山重作  
山崎久太郎 (1906)『清語新会話』 青木嵩山堂  
西島良爾 (1906)『最新清語捷徑』 青木嵩山堂  
馮世傑、市野常三郎、高木常次郎 (1906)『北京官話家言類集』 積善館  
馮世傑、野村幸太郎 (1906)『清国風俗会話篇：北京官話』 文求堂  
文求堂編集局編 (1906)『清国民俗土産問答：北京官話』 文求堂  
甲斐靖 (1906)『日清会話捷徑：北京官話』 弘成館  
金国璞 (1907)『虎頭蛇尾：北京官話』 北京日本人清語同学会  
渡俊治 (1907)『官話応酬新篇』 文求堂  
瀬上恕治 (1907)『官話問答新篇：日文対照』 東亜公司  
石山福治 (1908)『支那語文法』 文求堂  
皆川秀孝 (1908)『支那語動詞形容詞用法』 文求堂  
寺田由衛 (1909)『支那語要解』 寺田由衛  
李文権 (1910)『二十世紀清語読本』 文求堂  
張廷彦 (1911)『中外蒙求：北京官話』 文求堂